

にいがた

北から南から



しい気持ちになりながら尋ねた。

「高校終わったらどうする」

「うーん、専門学校だろうな」

「何の」

「うーん、分からない」

「ゆっくり考えるか」

「うん、工業短期大学なんていうのもいいなあ」

三年への進級を確実にした孫は、頑張れば来春卒業できる。これから自分の生き方を探ろうとしている孫。十八歳の春、なんと未来のあることだろう。齢七十二、今年年男の私にはなんとも羨ましいことだ。

子どものころから私のあこがれたホテルの宿泊を実現させてくれた孫。「もう一つの甲子園」へ連れて行ってくれた孫。型破りの行動でいろいろなことで楽しませてくれた孫よ、これからも笑いを巻き起こしながら生きていってくれ。

いい気持ちに酔った私は、孫のわりと正確で慎重な運転に身を委ねながら、そんなことを思っていた。

(なかむらみのる・阿賀野市)

教師の勤務・労働条件は

子どもたちの教育条件

—地域の教師として

父母として、市民として—

野村 紀子

中学教師になって五校目で居住地域の学校に勤務し、はや七年目を迎える。この間は私の息子たちが小・中学校の在籍時期と重なる。勤務する学校の子どもの過去・現在・未来が自分と、息子たちにつながっているという一体感を感じる時間を送ってきた。勤務時間外のPTA活動や部活動を担当し、親として息子たちの小中学校のPTA役員を努めることができた。地元で勤務していることから来る精神的な余裕は計り知れない。教員が地域でその経験を生かすには通勤時間がかからない居住地の近くに勤務できることが必要だ。

新潟県は全国でもまれな念書人事・広域人事異動方針のもと、教員の人事を行ってきた。



名目は離島や僻地の教員確保ということであったが、さすがに批判が多かったのだろう。〇五年度から上・中・下越をまたがせる管外異動をなくし、「居住地を中心とする」人事異動方針を打ち出した。しかし依然として一定年齢までに居住地から二〇キロ以上、また三五キロ以上の遠隔地に勤務しなければならぬという広域人事異動を残したままであった。それどころか、前年度まで認められていた異動希望地を記入することさえできなくなつた。私たち義務教育諸学校の教員は市町村教員でありながらその異動において「任命権」しか持たない県に「すべての人事は県が行う」と言われても何も言えない状況を作られた。

しかし、少し考えてみても県内の教職員の状況を一人一人把握した人事異動を県がすべて行うなどというのはあり得ないことである。では誰が？ この作業を行っているのが「学閥」であることは今では広く知られている。

学閥によって人事が牛耳られ、無派閥者に対する報復人事、差別人事がいまだにまかり

通り、物言わぬ教師集団を生む。学閥を批判する教師は学閥内でも多い。しかし、綿々とこの組織が続いているその理由はほかでもなく不法な裏の人事権を握っているためである。

本来、教員は地域に根ざした教育を行うために、その人事のシステムは他の公務員とは異なり、法的に守られていると言いたい。人事は本人の申し出を校長が地教委に具申し、また地教委が内申を行うことよって行われるのであり、県教委が一方的に任命を行うものではない。学校（校長）、地教委（教育長）と県教委がそれぞれ独立した立場で人事に関与できるようにされている。ところが本県では学閥がその独立した部分すべてを支配し、本来機能すべき人事のシステムが機能せず、それどころか教員管理のシステムに取って代わっている。新潟の教職員は行政と学閥の二重の管理を受けており、これは人事異動だけでなく校務分掌などにも及び、今後実施される教員評価にも影響する可能性が否定できない。

にいがた

北から南から



い。

この現実に対し、私が所属する新潟県教職員労働組合はこれまで人事の問題を最重要課題にして取り組んできた。「人事異動は管理運営事項であり組合交渉の内容ではない」などと、他県では到底通らない圧力をかける当局に対し、組合の権利を用いて真正面から、あるいは法的な手段を用い粘り強く運動を進めてきた。

そのひとつは徹底した情報開示請求である。個人の異動希望調書やそれをもとにして作られた資料がどこへあげられているのかあるいはどこでどのような会議が開かれていくのかを明らかにする。

次に県教委並びに地教委に対する申し入れと交渉である。県の方針と地教委の方針の矛盾がたびたび垣間見られる。

最後は不当な人事に対応する機敏な行動とその後の法的な手段による行動である。○六年度人事における内地留学後のAさんの不当

人事において、県人事委員会への審査請求では当時の義務教育課担当管理（のちに参事）のK校長を口頭審理の場で尋問し、県教委が当時の人事異動の状況を把握していなかったことを明らかにした（詳しくは新潟県教職員労働組合HP参照）。

人事異動は個人的な問題のようだがそうではない側面も持っている。地域の学校を築くために地域に暮らし、地域の父母、住民の要求を感じながら教育活動を行う「教師」という教育条件を整備する役割を持つ。行動の一步はその自覚から踏み出せるだろう。

（のむらのりこ・中学校教員）

